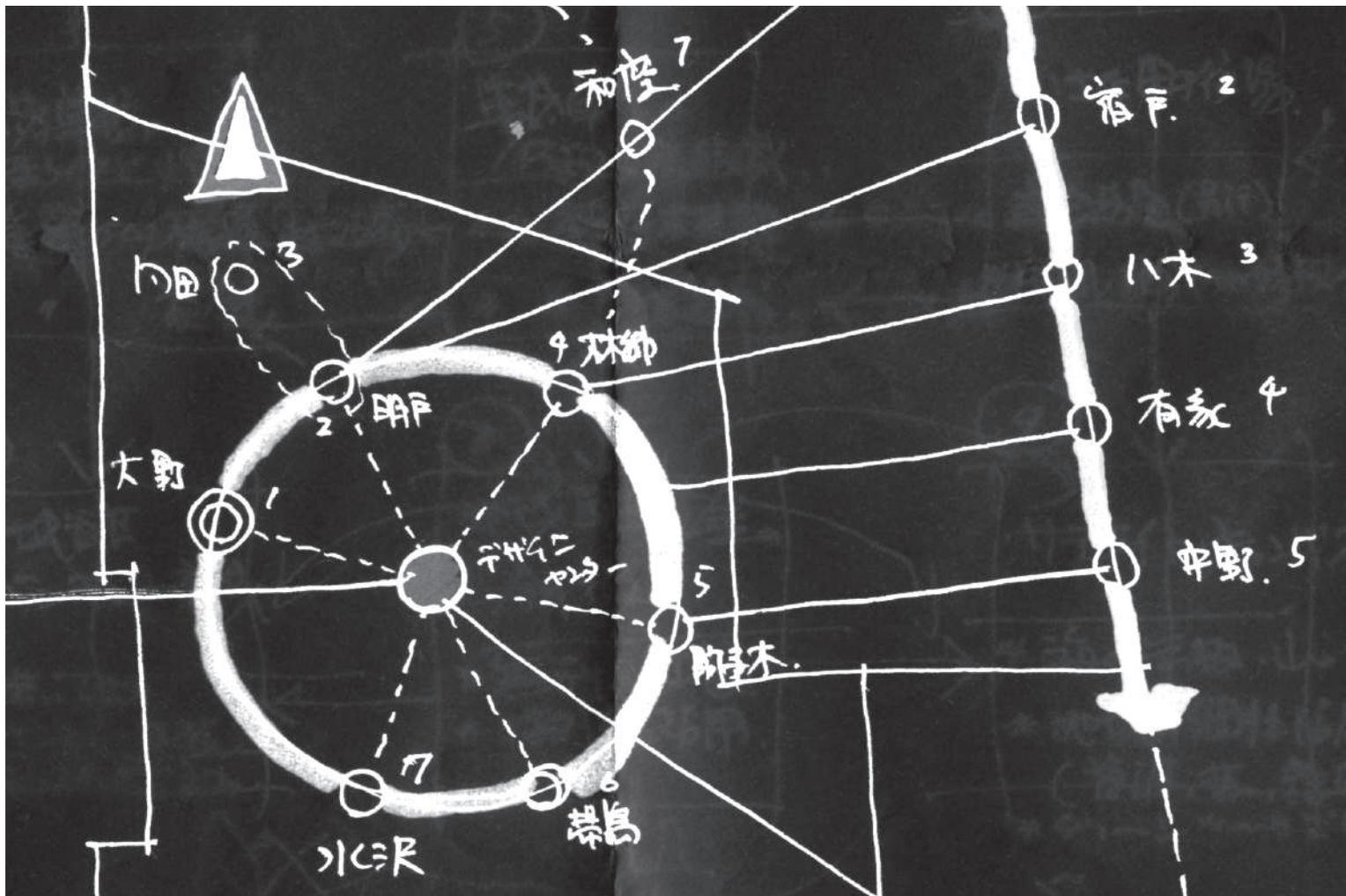


Urban Design Lab. Magazine

2015.11.30 vol. 235



受け継がれる意志

H I S S P I R I T I S S T I L L H E R E . . .

北沢猛先生特集 第2弾
遠藤新先生を訪ねて p.2

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室
<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

今月の編集担当：砂塚大河 高橋舜
編集長：今川高嶺
編集委員：中島健太郎 高橋舜 中井雄太
黒本剛史 砂塚大河 富田晃史 王誠凱



遠藤 新 (えんどう あらた)

工学院大学工学部建築都市デザイン学科准教授。1973年愛知県生まれ。東京大学工学部都市工学科卒業・同専攻修士課程修了。2004年博士(工学)取得。1997年-2005年都市デザイン研究室助手。主な著書に『米国の中心市街地再生 エリアを個性化するまちづくり』ほか多数。

遠藤新先生を訪ねて —北沢猛先生特集 第2弾—

The Interview of Assoc. Prof. Arata Endo at Kogakuin University

- Special Feature: Prof. Takeru KITAZAWA #2 -

7回忌を迎えた故北沢猛先生の人物像に迫るべく始まった連続インタビュー企画。第1弾(第230号)の特集でインタビューさせていただいた鈴木伸治先生からのバトンを渡すべく、編集部一同は西新宿高層ビル群の一角をなす工学院大学へ。超高層のキャンパスから見る東京の景色に高揚感を覚えながら奥に進み、研究室のドアをノックしました。待望の北沢先生特集第2弾。では、北沢先生と深く関わりのあった遠藤先生に、自身の学生時代の話から北沢先生との関わり、さらにこれからの都市デザインの職能に対するお考えなど、様々な話をお伺いしました。

(編集: M1 砂塚・M2 高橋)

一紹介も兼ねて、学生時代のお話を聞かせてください。

修士の時はプロジェクトものばかりやっていました。学部卒業の時に同期が卒業旅行に行くなか、一人肅々と研究室にこもって卒業設計を展覧会に出すために作業していて、その後修士に入るとすぐに研究室のプロジェクトで、長野県須坂の町並み環境整備事業の基本計画を作るプロジェクトをやっていました。修士の最初の頃は、Mini CAD(現・Vector Works)を使って計画図を作ったり施設の設計をしたりと、一人でCADの練習をしながらプロジェクトを中心に活動していました。

一修士研究はどのようなことをされたのですか。

気付いたら修論の時期になっていて、設計方面で頑張ろうかなと思い、修士設計をやりました。代官山ヒルサイドテラスの研究をしていて、オープンスペースの作り方や、建物の表層部分の作り方が面白いと思い、それをなんらかの設計言語にしようとして研究していました。一連のヒルサイドテラスの空間の特徴を分析し、ヒルサイドテラスの隣に敷地を設定して、その続きを設計するという修士設計を行いました。

一博士課程1年のときに助手になられたということですが、その経緯は…。

博士に進んだ時に北沢先生が赴任されました。博士課程では修士時代からやっていたプロジェクトをやりながら、北沢先生と一緒に新しい都市デザイン系のプロジェクトを少しずつやっていくつもりでしたが、進学早々に都市工の助手を引き受けることになりました。都市デザイン研究室は丹下研の流れから演習で都市設計をやっていたこともあり、西村先生なりに設計方面を強化していこうという思いがあったんだと思います。それで北沢先生に来てもらったり、演習助手に自分のような設計ばかりやっていた若手を

丹下研究室の流れから、西村先生なりに設計方面を強化していこうという思いがあったんだと思います。



北沢先生が最初に考えていたのは、
もっとガリガリとデザインするオフィスのようなものでした。

送り込んだりしていたんだと思います。助手着任後は（鈴木）伸治さんが博士論文を書き始める時期で忙しくなるということもあって、修士時代のものだけでなく北沢先生が始めたプロジェクトも多く関わりました。

一赴任された当初は、北沢先生はどのような活動をされていたのでしょうか。

北沢先生は研究室に来て最初の年からアメリカのアーバンデザインの研究を始めました。北沢先生が大学で学び横浜市役所の都市デザイン室で実践していた頃というのは、70年代のニューヨークや80年代のウォーターフロントなど、日本がアメリカのアーバンデザインから学び、実践に取り入れていたものも多かった。北沢先生はそうしたアメリカの成果と現状を自分の眼で見て、そこから日本のアーバンデザインの次の展開を膨らましていこうと考えていたんだと思います。

アメリカ研究の二年目くらいからは自分も同行させてもらうことになり、ミネソタ州のセントポール市を拠点にして色々な都市を見て回りました。東海岸、

中西部、西部、南部の幾つかの都市を巡りました。都市再開発会社等が中心となって衰退したエリアを再生する計画が形となって見えてきた時期だったので、それらの仕掛け人となる人に、どんな都市デザインの戦略を持って、どんなことをやってきたのかをヒアリングしていました。北沢先生は、そうしたアメリカの実践を元行政マンの目線で見ながら、アーバンデザインの新しい方法論を考えようとしていたのだと思います。

一現地視察やヒアリングなど、アメリカでやっていたことがその後のアーバンデザインセンター（以下、UDC）の構想につながっていったのでしょうか。

調査をしていた頃のアメリカはBIDが注目されていた時期でした。そうした「まちづくり組織」を設置して、衰退したエリアの再生を担っていくようなアーバンデザインをアメリカで実際に見て、北沢先生なりに日本での展開の手応えを感じていたのではないのでしょうか。

1998年に横浜で開催された第2回都市デザインフォーラムの際に、セントポール市の都市再開発会社で活躍されて

いたウェイミング・ルーさんと呼んで話を聞きました。今思うと、北沢先生はウェイミング・ルーさんには大きなシンパシーを感じていたというか、結構な影響を受けていたように思います。ルーさんも元行政マンで、ミネアポリス市ではニコレットモールの計画を中心とするダウンタウンの再生計画などのアーバンデザインを実践してきた人です。1991年に行われた第1回都市デザインフォーラムで意気投合してから北沢先生とは長い付き合いだったようです。

一UDCについて、当時北沢先生はどのようなことを考えていたのでしょうか。

北沢先生が一番最初に考えていたのは、現在のUDCよりもっとガリガリとデザインするオフィスのようなものだったかと思います。大野村や釜石のプロジェクトをやっていた頃、そういうオフィスをつくりたいという話を何度も聞いていました。プロジェクトを進める地域ごとにアーバンデザインのオフィスをシリーズで作っていきたい、という話を度々口にしていました。その時は「アーバンデザインオフィス」という名前を



HIS MIND IS

STILL HERE...



設計者ではなく、行政マンが来たことで 都市デザインのあり方が大きく変わっていきました。

ノートに書き記していたのですが、その後アメリカのクリーブランド市で大学が中心になって地域のアーバンデザインを進めている「CUDC」(※ Cleveland Urban Design Collaborative) にヒントを得て、「UDC ○」という言い方に変ったように思います。アメリカのアーバンデザインセンターやヨーロッパのアーバンセンターの事例やコンセプトが合体して、日本版のUDCになったのではないかと思います。

一北沢先生とアメリカと一緒にいった際に、印象的だったことはありますか。

北沢先生は、いつもホットドッグを食べていました。あんまりちゃんとしたレストランに入った記憶はないですね。(笑)

あと、北沢先生とはとにかくよく街を歩きました。アメリカに行くときたいいの場合向こうの人が車で案内してくれるんですが、それに乗らずによく歩いていました。

一岩手県の大野村や釜石などでは、実質的に遠藤先生が設計をされたという話を仲治先生からお聞きしました。

岩手県の一連のプロジェクトはもともとは西村先生が岩手県庁の知人を通して始められたものです。歴史的資源を生かして街をどう立て直していこうかというプランをつくり、実際に街を変えるアクションにつなげていこうとしていました。ポストイットを駆使したワークショップを重ねて、住民の合意形成をするというのを研究室でやるようになったのは岩手県のプロジェクトの頃からだっ

たと記憶しています。住民参加のワークショップは北沢先生は横浜市時代には何度もやっていたそうで、大学に赴任されてからも住民との合意形成の常套手段として用いられました。

北沢先生はファシリテーターとしてのずば抜けた能力を持っていました。どこで学んだのですか、と聞きたくなくらい。「ポストイットの魔術師」といった感じで(笑)、模造紙のまとめ方やポストイットの使い方はすごいものがありました。当時の学生は岩手のプロジェクトを通して、北沢先生と一緒にやりながらそういった方法論を覚えていきました。

一北沢先生が来られて、研究室が変わった部分はありますか。

プロジェクトの数と種類が増えたということはあると思います。それまでは古川や須坂などの街並み環境整備事業など、歴史的資源を調査し、それを生かして計画を作るものが多かったかと。北沢先生が来られてからは、歴史的資源のあるまちだけではなく、岩手県の大野村など、都市ではなく資源も何もないような場所で新たな価値を見だして、アーバンデザインを構想していくようなプロジェクトも行いました。岩手の田舎の町は、全然アーバンじゃない。(笑)しかし、そういう場所でも地域の人達の意向を収集し、歴史的かどうかに関わらず資源を見だしマッピングしたりする作業は有効で、それが方法論として広がっていったように思います。国等の補助事業の枠組みの中でプロジェクトをやるのではなく、道筋が何もないようなところからまちを構想するというのを、北沢先生は

従来の方法をうまく応用しながらやっていました。

一田村や郡山などのまちも手がけていたそうですが、北沢先生は地方都市に力を入れていらっしゃったのでしょうか。

そうですね。岩手もそうだし、喜多方、京都の舞鶴もやりました。歴史的な資源は探せば出てくるし、どのまちにもあるものですが、そういったものだけに頼らない新しい空間のデザインを通じて地方都市を再生するというのは、北沢先生が来てからやり始めたことなのかも。

西村先生も当然そういうことは考えていたと思いますが、それを実践してもらうために北沢先生にお願いしたのでしょうか。「都市デザイン研究室」に名前が変わったのもその頃でした。「都市設計研究室」だった当時、渡辺定夫先生の後任の山田学先生が亡くなられて、西村先生が渡辺・山田研の一切の仕事を引き継ぐ形になりました。西村先生は歴史的な街に関連した仕事を多く引き受けていたようですが、やはり都市設計の部分も引き継がなければいけないということで、北沢先生を招き「都市デザイン」という形で引き継いでいったんだと思います。特に、建築の設計者ではなく、行政マンが研究室に来た影響はとても大きく、そこで都市デザインのあり方が随分変わったように思います。

一プロジェクトでの北沢先生の様子について聞かせてください。

行政が事業化できるように計画をまとめるのがうまく、まさに行政マンならではのやり方でプロジェクトを進めている



大野村での会議の様子



印象でした。役場の人との話でも「元行政マンだからこそ通じる話がある」と、北沢先生自身もよく仰っていました。それだけでなく、まちのおばちゃんたちにも相当ウケが良かった。住民を味方につける行政マンは強いなあと思って見ていました。住民を味方につけるということは、現在の僕の仕事でも常に意識するところですが、そういった技術は北沢先生に学んだものかもしれません。

一北沢先生は飲み会が好きだったと聞いていますが…。

はい、まちの人たちを巻き込んでよく飲み会をしていました。飲み会に誘ってたいがい反応がいいのはおばちゃん、おばちゃん達と一緒に飲む機会がよくありました。

北沢先生から学んだことは沢山ありますが、中でも印象的だったことの一つは、住民や行政のなかにスパイを作るということ。つまり、遠隔地のプロジェクトを遂行するには、それなりの情報網を持っていることはとても重要です。現地の重要な情報を得るためには、遠隔地であろうと常に住民と良好な関係を築いておくことが大切だということを教わりました。

一北沢先生は「都市デザイン」をどのようなことだと考えていたのでしょうか。

大学から社会に出て一番最初に気づくのは、アーバンデザインはチームでやっているということ。我々は「計画を作る」

という意識があるから、対象をどこまで網羅するか、どういう風にして戦略を立てて全体を動かしていくのかということ、俯瞰的な目線から描くことまでは苦もなくできる。

ただ、全部を動かして形にしていくのは、アーバンデザイナーという一人じゃ絶対にできない。そこで信頼できる人をチームに入れて、いかに任せていくのか。一方で全てを任せきらずにアーバンデザイナーがプロジェクトの全体を主導する立ち位置と影響力をどうやって持ち続けるのか。そこが大事なんだと、北沢先生は仰っていた。北沢先生自身、当然一人でやろうと思っていたわけではなくて、建築分野には気の合いそうな建築の専門家の方を呼んできて一緒にプロジェクトに参加してもらったり、照明は照明の専門家に任せたりしていた。大事なのは全体をどういう方向にディレクションするのか、というところ。全体をつなぐ・まとめるという作業をアーバンデザイナーがやらなければ都市の構想は進んでいかない。北沢先生が僕らに伝えたかったのはそこだと思います。

一ディレクター的な存在が育っていかねければならないということでしょうか。

そうです。ディレクター的な人は設計したり、絵を描けたりしない人でもよい。もちろん自分が絵を描けるのであれば、それを強みにしてアーバンデザインをディレクションしていけばいい。もしできないのであれば、そうじゃないアプ

ローチでディレクションすればいいのだと思います。ただ外せない点として、空間的なことをどうやってチームで共有していくのか。その手法は自分なりに持っていないといけません。言葉なのか、既存の事例をうまく伝える技術なのか。

絵が描けると、空間的な考えをその場で共有しやすいですね。北沢先生は飲み会の席でも、割り箸の袋の裏に「こういうのをつくろう」と言いながらよく絵を描いていらっしやいましたよ。

一現在建築系ではない学科で都市デザインを教えていらっしゃる伸治先生は、都市デザインを概念的に学んで、建築の人と空間的なことも話せる人が育っていくことが大事と仰っていました。

空間の話を持ち出すか持ち出さないかは、都市を構想する際に経済系の人と我々との一番の違いです。空間がこうあるべきだとは経済系の人には絶対に言わない。AかBか、どちらを選択した方が得か、その結果として都市はこういう姿をしている、ということは言うが、空間のあるべき姿は彼らにとって結果でしかありません。我々はこの空間がどうあるべきか、その道筋をどうすべきかを考え、提示しなければなりません。そこが都市デザインを専門として学ぶ我々の責務です。そういう意味で経済系の人とは相容れないところがありますね。

また、1/100スケール等の詳細な設計図面を描くところを仕事にしている建築設計者やランドスケープアーキテクト

全てを任せきらずにアーバンデザイナーがプロジェクトの全体を主導する立ち位置と影響力をどうやって持ち続けるのか。そこが大事なんだと北沢先生は仰っていた。

複数の空間像をどうやって一つの現実の空間にまとめていくのかを考えることが我々に求められる技能なんです。

と（我々のような）アーバンデザイナーの仕事も違います。アーバンデザイナーに求められるのは、そういった詳細図面を描くことではありません。設計をするということは、ある線をどこに引くのかを決めるということ。建築などのモノの設計は様々な与条件をもとに最終的にある線を引くことだけど、空間になるとそこまで厳密ではないアバウトなものだから、もう少しざっくり考えられます。一本の線を描くのととは違う次元で、この空間をAではなくてBにするということを誰かが決めて、その方向に全体の流れを持っていかないとはいけません。アーバンデザインはそこをやっている仕事だと思っています。

一経済系・建築系の人々をつなぎ、一つの方向に導くのが都市デザインの仕事ということですね。

そうですね。誤解を恐れずに言うと、好ましい将来像とか空間像というものを、建築家は一つしかないと思っていますが、我々のように都市の専門家は一つの場所であっても複数の好ましい空間像がありえると思っています。「住宅地」という観点から見たらこういう空間像が正解かもしれない。でも、まちは住宅だけじゃなく、商業者もいて賑わいの場でもある。「賑わいの場」という観点で見ると、空間像は商店を中心としたものがベストなのかもしれません。また、例えば釜石ならば、漁業のまちであると考えれば、「水産加工業」の文脈があり、そういう目線から見ると空間像は海から考えてこうなるよね、といったようになります。

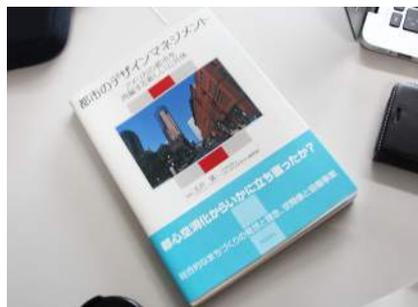
同じ場所に3つ4つの空間像が許容できて、それらが共存しているのがまちというものですね。それら複数の空間像をどうやって一つの現実の空間にまとめていくのかを考えることが我々に求められる技能なんです。そこが、アーバンデザインの一番大事なところだと思います。一つの空間像を「絵」にするのは建築家、ランドスケープアーキテクトがやりますが、いろんな空間像を一つの空間にまとめる（合意形成する）のがアーバンデザイナー・都市計画の人がやるべき領域なんだと思います。

一そこが重要であるからこそ、アーバンデザインの職能はあるといえるのでしょうか。

その意味で、お金になるかどうかは別として、職能はあるはず。まちには様々な価値観を持つ人が住んでいる。共存していかないといけないから、複数の市街地像を共存・調和させることに価値が出てきます。そして、そこにアーバンデザインの職能があるべきなんだと思います。共存しえる価値の形成を空間志向で考えることが、東大都市デザイン研究室が昔から目指してきたところではないかと思っています。

一最後に、次の人を紹介してください。

伸治先生から僕に来た流れでいったら、次は横浜国立大学の野原卓先生でしょ。大野村の続きもやっていますし、北沢先生のいろいろな話を聞けると思います。野原先生とは研究室にいた時期はかぶっているんですが、僕が在外研究でアメリカに行くときに大学の仕事を全部任せちゃいました。（笑）というわけで野原先生をお願いします。



▲北沢先生のアメリカでの知見がまとめられた『都市のデザインマネジメント』。懇意だったウェイミング・ルー氏についてもこの中で触れられている。

*

遠藤先生、お忙しい中貴重なお話を聞かせていただき、誠にありがとうございます。ありがとうございました。

2回目の特集を終え、北沢先生の人間像が徐々に見えてきたように思います。第3回は、遠藤先生にご紹介いただいた横浜国立大学の野原卓先生にお話を伺います。次回もどうぞご期待ください。■



11/12

まちなか研究発表展示を開催！
10月24-25日に行われた三国湊～東尋坊ストリームで三国PJチームが行った研究発表展示に関する報告です。



11/13

飯山高校、訪問。
10月22日に長野県・飯山高校の高校生たちが研究室を訪れました。その時の様子をご紹介します！



11/20

都市設計特論第一、始まりました！
西村先生の担当する「都市設計特論第一」が開講しました。2回目以降についても随時情報を更新してゆきます。



11/26

佐原まちぐるみ小劇場
10月末から行われた「佐原まちぐるみ小劇場」の様子をお伝えしています！



11/26

松本市現地調査報告会
夏に松本市で実施した現地調査の内容を共同研究者の方々に報告しました。



11/27

神田のキャンプ場に現れた情報センター「ウチクル」
10月31日から4日間行われた「アーバンキャンプトークショー」、および神田PJの企画「ウチクル」の紹介です。



11/27

超多町探検。開催しました！！
神田暮らし探検隊ツアー「超多町探検。」を開催しました。

是非ご覧下さい：<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/>

12月の予定

- 12/8,10 修士論文中間発表会（地域デザイン研究室と合同）
- 12/13-16 現地調査（三国PJ）
- 12/17 研究室忘年会
- 12/20 『都市空間の構想力』出版記念イベント

編集後記 砂塚 大河

「羊の解体」を見せてもらえると聞き、びくびくしながらゲルの外で待っていると、家主が徐ろに草原の上に一匹の羊を寝かせました。次の瞬間、家主のナイフが羊のお腹に刺さり、すかさずその穴から強引に手を入れて血管を圧迫し息の根を止め、そのまま解体作業が始まりました。さっきまで鳴いていた羊さんがお肉になっていく光景に、ただただ見入ってしまいました。生きるために食べる。食べるために殺す。これは生活の中の一風景。スーパーで売っているスライスされた豚肉300gも、豚さんだったことを忘れていたような気がします。いろいろ学んだモンゴルの旅でした。



URBANDESIGN
LABORATORY